第一章　小学校時代

私が生まれたのは、１９５０年（昭和二十五年）五月十六日、筑紫郡比左村でした。当時はまだ比左村でしたが、１９５４年四月一日より近隣一村と共に福岡市に編入されて福岡市南区となりました。父・不二雄は、その頃地元で唯一大手の建設会社で専務として勤めていました。と言っても田舎のものなので、今と比べるべくもない規模だったと思います。我が家はその会社裏手、玉泉寺の参道からあぜ道をすこし入った場所にあり、その会社が所有している貸家でした。

バラック小屋ではなかったですが雨漏りがひどく、雨の日は鍋やヤカンをあちこちに並べたものです。また、衛生面も良くない時代で、玄関先の井戸の側で身体についたダニ・ノミ・シラミを退治するために、母に頭からＤＤＴをかけられたりしました。たまに古い映画でＤＤＴを散布するシーンを見ると、自分の頭髪がまだらに白くなった光景がよみがえります。畳の縁に潜むシラミや飛び跳ねるノミを捕まえ、両手の親指の爪でパチンとつぶしたことは今でも覚えています。

父が勤務していた会社には跡継ぎの息子さんがいたので、私が五歳の頃暖簾分けのかたちで独立し、自身の建設会社「青木組」を設立しました。会社から退職金代わりに住宅一軒分の材木をもらい、それをもって実家を建てたそうです。基礎下に松の木杭を「エンヤッショ！エンヤッショ！」の掛け声で力強く打ち込む人夫のおじさん、おばさんの姿を幼い時分でしたが、非常に印象的に覚えています。新居が完成し、翌年、自宅二階にて産婆さんの手により妹が誕生しました。戦後の復興期であり建築工事は有り余るほどで、父の会社で手配しきれない案件はよその工務店に仕事をまわしていたそうです。

自宅は四Ｋ二階建で一階は四畳半洋間、二階は昔ながらの畳部屋でした。洋間の一階は事務所で、父は設計および事務等を行っていたので、私や妹が騒ぐたびにうるさいと叱られ、度々殴られたものでした。そんな私たちをかばう母も同じように殴られていました。父は毎晩のように夜遅くに帰ってくるので、帰宅するまでの時間、母と私と妹の三人で遊んだり話したりするのが一番平和なひとときでした。

母は事務の仕事を手伝っていましたが、徐々に仕事が増え、家事ができにくくなったので、アニメでよく出てくるような体格のよいおばさんに手伝いにきてもらうようになりました。その方は、戦時中、朝鮮で覚えたキムチやナムル、シッケという甘酒を作るのが上手で、それを頂くのが大変楽しみでした。甘いものが少ない時代でしたので、シッケをもらうたびに妹と顔をほころばせたものです。また、母の代わりに父からの暴力の盾によくなってくださったものです。

幼いながら父の仕事で次のようなことを覚えています。実家から車で三〇分くらいのところに馬瀬山があります。現在では道路事情も良いのでこの程度で済みますが、当時は砂埃の立つ砂利道で一時間半から二時間近くかかりました。その北側の裾野で昭和天皇をお迎えしての植樹祭が催されることがありました。その開催準備で父は木造二階建の公共建設を受注しました。

当時の工事用運搬車両といえば、今では懐かしい「バタバタ」オート三輪でして、相当の時間をかけ現場へ出かけていました。滞りなく進み上棟も済み、予定どおり順調に進んでいる最中、大型台風が通過したのです。「ルイズ台風」の後に呼ばれる歴代屈指の台風でした。関東地方を除いてほぼ全国に影響を与え、特に新潟市では、台風通過後の十月一日に市内で火災が発生し、台風の通過直後ということで強風が吹いていたため、大火へと繋がる引き金となりました。